



角川文庫

—3144—

完訳 わが闘争

(下)

アドルフ・ヒトラー

平野 一郎 訳  
将 積 茂



角川書店



## 目次

### II 国家社会主義運動

#### 第一章 世界観と党

ブルジョアの「綱領委員会」 「民衆代表」の生活から マルク  
シズムと民主主義の原理 世界観対世界観 「民族主義的」と  
いう概念 宗教的な感じから疑いを許さぬ信仰へ 民族的感覺  
から政治的信条へ 政治的信条から闘争団体へ 人種と人格に  
反対するマルクシズム 人種と人格に立脚する民族主義的態度  
自由な力の競争の促進 党のためのまとめ 政治的信条の形成

#### 第二章 国家

国家についての三つの有力な考え方 誤れる「ゲルマン化」の観  
念 土地だけをゲルマン化すべし 国家はそれ自体目的ではな  
い 文化的な高さは人種によってきまる 国家社会主義の国家  
観 国家の評価の視点 人種的分裂の結果 ドイツ民族の使  
命 国家—生存競争における武器 世界史は少数のものによつ  
て作られる 雑種の劣等さ 人種の自然的更新過程 人種混



4  
合の危険 民族主義国家と人種衛生 八種の純粹な辺境植民地

ドイツ青年への呼びかけ ブルジョアジーの無力 民族主義国

家の教育原則 スポーツの価値 自信の暗示力 教育活動に

おけるうぬぼれ 学校時代と軍隊時代との間の監督 最後、最

高の学校としての軍隊 性格の陶冶 寡黙への教育 意志力

と決断力の養成 責任感の養成 学問的教育の原則 頭脳の

負担過重はいけない 言語教育の原則 歴史教育の原則 一

般教育と専門教育 人文教育の価値 ありきたりの「愛国」教

育 国民的誇りの喚起 過激な愛国主義に対する不安は無気力

である 人種意識の注入 人材の国家的選抜 カトリック教

会の民衆との結合性 労働の価値 等級別賃銀 理想と現実

### 第三章 国籍所有者と国家の市民

今日どのようにして国家の市民となるか 市民—国籍所有者—外

人 国家の市民がドイツ国の主人である

### 第四章 人格と民族主義国家の思想

貴族主義的原理による構成 人格と文化の進歩 人格の価値

多数決原理 マルクシズムは人格価値を否定する 最良の憲法

協議会と責任ある指導者 国家社会主義運動と来たるべき国家



## 第五章 世界観と組織

三〇

闘争と批判 世界観は不寛容たるべし

政党は妥協に傾く

新世界観にもとづく社会 指導と服従

運動の指導原理 国

家社会主義と民族主義的理念

## 第六章 初期の闘争——演説の重要性

三三

毒化宣伝に対する闘争 時流に抗して

深慮遠謀の政策 演

説の経験 講和条約についての説明

演説は書物より影響が大

きい 演説によるマルクシズムの成功

演説の効力の心理的条

件 演説家と革命 演説家としてのベートマンとロイド・ジョ

ーシ 民衆集会と必要性

## 第七章 赤色戦線との格闘

二八

ブルジョアの「大衆集会」 国家社会主義の大衆集会 疑わし

い赤いポスター マルクス主義者の動揺せる戦術 敵がわれわ

れを一般に知らせる 不法な警察のやり方 心理的に正しい集

会管理 マルクス主義的集会の技術 ブルジョアの集会技術

国家社会主義の場内整理隊 統一的象徴の意義 新旧の黒・

赤・金 新旧ドイツ国旗 国家社会主義の旗 国家社会主義

の象徴の説明 ツイルクスの第一回集会 集会につく集会

むなししい強制解散の試み 「集会は続行する」

## 第八章 強者は単独で最も強い

運動の優先権 指導権争い オーストリアとプロイセン 民族主義の分裂の原因 「労働団体」 民

## 第九章 突撃隊の意味と組織に関する根本の考え方

権利の三原理 民族体の三クラス 最良のものの犠牲 悪の繁茂 結果としての瓦解 義勇軍の成立 逃亡兵に対する不適當な寛大さ 逃亡兵と革命 前線兵士に対する恐怖 左翼政党の協力 ブルジョアジーのろろ絡 ブルジョアジーの降服 革命はなぜ成功したか? 「国家維持者」の消極性 マルクンズムへの降服 国家主義政党の無為 理念なくして闘争力なし 民族主義理念の主張 防衛隊の必要性 防衛隊の課題 国民の防衛で、国家の防衛ではない 国家機関の無能 自衛隊にして「防衛隊」にあらず なぜ防衛隊ではないのか? 秘密組織ではない 国事犯は「除去」すべきか? 突撃隊のスポーツ訓練 目印と公然性 ミュンヘンにおける最初の行進 コブルクへの行進 闘争組織としての突撃隊の評価 一九二三年の結果 一九二五年の新しい突撃隊

## 第十章 連邦主義の仮面

軍需会社と反プロイセンの気分 けん制策としての反プロイセン

扇動 「バイエルンの小邦分立主義者」クルト・アイスナー

反プロイセン扇動に対するわが闘争 「連邦活動」 ユダヤ人の

扇動戦術 宗教的不和 連邦国家か単一国家か？ 国家主義

国家か奴隷植民地か？ 統一化の傾向 中央集権化の濫用

個々の連邦国家の抑圧 中央集権は政党経済に好都合である

ドイツ国の国家主権 諸邦の文化的課題 軍隊と個々の連邦国

家 一つの民族—一つの国家

## 第十一章 宣伝と組織

理論家—組織者—扇動者 支持者と黨員 宣伝と組織 黨員

採用の制限 無気力者の威かく 運動の再編成 議会主義の

廃止 指導者の責任 運動の萌芽状態 運動の構成

## 第十二章 労働組合の問題

労働組合はぜひとも必要か？ 国家社会主義労働組合とは？

国家社会主義的な使用者と労働者の認識 職能代表会議と経済議

会 労働組合は二つあってはならない 労働組合と指導者の問

題 まず世界観闘争 設立しないのは、へたに設立するよりも

## 第十三章 戦後のドイツ同盟政策

三七

無能な原因 外交政策の目標—明日の自由 失われた領地を解

放するための前提 戦前の間違った大陸政策 今日のエーローツ

パの勢力関係 イギリスとドイツ 「フランス」の乱れ イ

ギリスの戦争目標は達せられなかった フランスとイギリスの政

治目標 ドイツとの同盟可能性 ドイツは今日同盟できるか？

イギリス人とユダヤ人の利害の相違 ユダヤ人の反独的世界扇動

フランスとユダヤ人の利害の一致 二つの同盟国が可能である、

イギリス—イタリヤ フランスに対するへつらい 南テイロー

ル問題 独伊協調の妨害 南テイロールを売ったもの 武力

ではなく同盟政策で 同盟政策についての三問題 ドイツ再生

の最初の徴候 ヴェルサイユ条約の怠られた利用 「主よ、わ

れらの闘争を祝福し給え！」 異常な反独意識の好転 自由闘

争に対する明確な意志 一つの敵に集中 売国奴に対する論判

国家主義国家の利益は勝つか？ ファッショ的イタリヤとユダヤ

人 イギリスとユダヤ人 日本とユダヤ人 世界の敵に対す

るわれらの闘争

## 第十四章 東方路線か東方政策か

三三



外交政策問題についての偏見

国家の領土の意味

領土の大き

さと世界強国

フランスとドイツの植民政策

国家社会主義の

歴史的使命

千年にわたる政策から残った結果

盲目的愛国主

義ではだめだ!

旧国境を望む声

国家社会主義の外交目標

外交でセンチメンタリズムは不要

東国政策の再開

ビスマ

ルクの対ロシア政策

「被抑圧国民同盟」

イギリスのインド統

治は動揺しているか?

ロシアとドイツの同盟はどうか?

戦

前のドイツーロシア

将来の政治的誓約

ドイツ・イギリス・

イタリア同盟

東方政策のための前提

国家社会主義の外交政

策上のなつ印

## 第十五章 権利としての正当防衛

ひきょうな屈服は恩恵をもたらさなかった

一八一三年までの七

年ーロカルノまでの七年

不快な警告者の迫害

フランスの不

動の戦争目標

フランスの不動の政治的目標

フランスとの決

定的対決 ルール地方の占領

ルール占領後にながさるべき

だったか?

マルクシズムとの怠慢な決算

武器ではなく、意

志が決定的である

クノーの道

「統一戦線」

消極的抵抗

国家社会主義者の態度

一九二三年十一月

義務の勧告者であ

るわれらの死者